

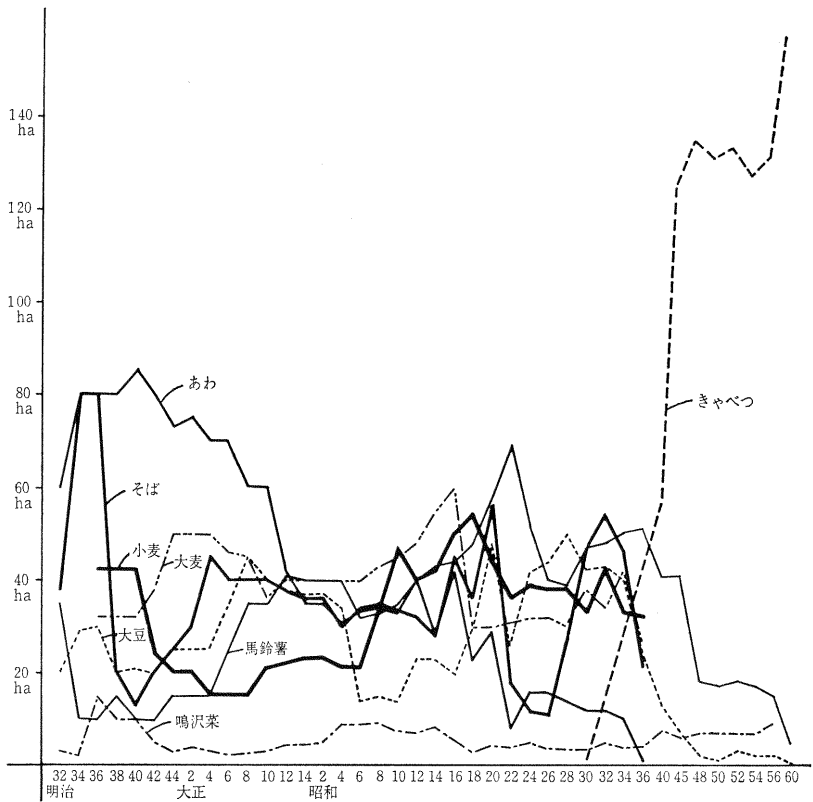
第五章 作付面積からみた農産物の推移

はじめに

第一章から第四章までみてきたように、本村の産業は、畑作、養蚕を中心とした農業及び林業が主であることが判明した。しかし、より詳細にみていくと、たとえば、養蚕業が昭和四十年代初頭に消滅したように、時代的に、その盛衰には、大きなものがある。もちろん、畑作においても明治期の麦、雑穀類、戦後の蔬菜など栽培作物に移り変わりがみられる。そこで、本章では、畑作物の作付面積の増減を指標として、鳴沢村農業の明治中期から現在までの移り変わりのあとをみていきたい。論点を絞りこんだため記述が非常に細かくなつた点をお断りしておく。

明治三十二年から昭和六十年までの畑作物作付面積の推移を示した第七図によれば、八十五年間の推移は次の四つに時期区分できるだろう。即ち、アワの作付が他の農産物の作付を大きく上回り、明治四十年には八十五ヘクタールとピークに達しているが、その後、急激に減少していく、明治三十二年から大正十二年までを第一期とする。第二期は、それまで圧倒的な作付面積であったアワが、ピーク時の半分以下の面積に急減し、それにかわって、大麦・小麦・馬鈴薯の作付面積が、年を追うごとに漸増していく大正十二年から太平洋戦争が始まる昭和十六年までとする。そして、第三期は、戦争をはきんで、昭和十六年から同三十六年までとする。即ち、この時期には、作付がふえる傾向に

(第7図) 農作物作付面積の推移



あつた大麦・小麦の面積が急減し、それらと対照的に、昭和十八年から同二十年にかけて、ソバの作付が増加し、年ごとにふえる傾向にあつた馬鈴薯が、昭和二十二年に六九・九ヘクタールと、ピークに達する。しかし、そうした伸びも一時的で、二年足らずで急減する。昭和三十二年ソバが第二のピークを迎えるが、同三十六年再び減少している。第四期は、昭和三十六年から同六十年までである。この時期の特色は、第七図からもよみとれるように、キャベツの作付面積が他の農作物の作付面積を圧倒している点である。

この四つの時期を詳細に分析することによって、本村農業生産の変遷をみていきたい。

明治三十二年から大正十二年

明治三十二年から大正十二年の第一期二十四年の農産物作付面積の推移を、前掲第七図をもとに詳細に検討してみると、面積の変動、例えば、アワのように作付面積が広いのにもかかわらず、二十年たらずの間に半減している作物、そばのように、作付面積が一気に倍加するが、二年で半減以下になる作物など作物グループを指摘できる。多少の増減等もあるが本村で栽培されていた農作物を作付面積を指標として、個々に詳細に検討していくことにする。

まず、アワについて年を追ってみていくと、明治三十二年六十ヘクタールであった作付けが、同三十四年には、八十ヘクタールと増加し、さらに、同四十年には、八十五ヘクタールとピークに達する。しかし、翌年以降漸減に転じ、同四十四年七十三ヘクタールに減少、大正二年には、わずかながらではあるが、増加して七十五ヘクタールになっている。しかし回復したのはこれ限りであり、再び減少傾向となる。その際、注意したいのは、減少の傾向が坂をころがり落ちるようなものではなくて、階段をおりていくような形だということである。つまり、大正四〇六年、大正八年、十年と、作付面積は一定であり、大正十年を過ぎてからは、作付面積は急減する。昭和二年には、三十五ヘクタールと、二十年の間に半分以下にまで減ってしまう。減少する傾向にはあっても、大正十年までは、他の作物の作付を大きく引き離しており、本村農業において比重が高かったといえよう。本村には周知の通り、村内には河川や湖沼が全く存在せず、水田は皆無であり、畑作中心の農業、とりわけ、明治三十二年から大正十二年まではあわの生産が、本村農業の中心といえよう。しかし、明治四十年のピークを過ぎた後の作付面積の減少に伴って、他の農作物の作付面積の増加がみられない。これは何らかの産業の発展のきざしと考えられる。私の見方では養蚕と林業ではない

だろうか。

次に、そばの作付面積について詳細に検討していきたい。前掲第七図をみて目につくことは、明治三十二年に三十ハクタールの作付面積が、同三十四年、一気に八十ハクタールと倍加している点である。しかし、同三十八年には二十ハクタールと、明治三十四年の作付面積の四分の一にまで急減し、同四十年には十三ハクタールと減少している。同四十二年には、作付面積は、上向きに転じ、同四四年二十五ハクタール、大正二年三十ハクタール、同四年には四十五ハクタールと、明治三十二年の作付面積と同じ水準にまで回復し、同六年には、四十ハクタールとわずかながら減少し、三十八ハクタールに減少する同十二年まで作付面積に変動はみられない。このようにソバは、前掲第七図をみてわかるように、図中の他の農作物と比較して作付面積の増減の変動が激しく複雑な動きをしているのが、ハッキリと読みとれると思う。

次に、小麦の作付面積の変動について、前掲第七図により検討していくと、明治三十六年から同四十年まで四十二ハクタールであったものが、同四十二年には、二十四ハクタールと半減し、同四十四年にはさらに減少し、二十ハクタールとなっている。大正期になって、同四年に至っても減少傾向はつづき、十五ハクタールとなっている。この傾向は同八年まで続き同十年には、二十一ハクタールと回復し、同十二年には、二十二ハクタールと、わずかながらではあるが、作付面積は増加する傾向にある。

次に、大麦の作付面積の変動について、詳細にみていきたい。大麦の作付面積は、明治三十六年から同四十年まで、三十二ハクタールと一定であったものが、同四十二年に三十八ハクタール、同四十四年に五十ハクタールと、四年間で、約一・五倍に増加している。大正二年～四年にかけても五十ハクタールと一定であったが、大正六年からは、減少しはじめ、同六年四十六ハクタール、同八年四十五ハクタール、同十年、三十六ハクタールと、明治三十六

年と同じ水準にもどってしまった。大正十二年には四十ヘクタールと回復している。

次に、大豆の作付面積の変動について詳細にみていきたい。明治三十二年、二十ヘクタールであった作付面積は、同三十四年二十九ヘクタール、同三十六年には三十ヘクタールと漸増したが、同三十八年二十ヘクタールと、同三十二年と同じ水準にまで減少するが、同四十年二十一ヘクタールと回復し、四十四年二十五ヘクタール、大正六年三十五ヘクタール、同八年には、四十五ヘクタールと、約二十年間で二倍になっている。しかし、大正八年をピークに、大豆の作付面積は減少に転じて、同十年四十ヘクタール、同十二年三十八ヘクタールとわずかながらではあるが、減少する傾向が見られる。

次に馬鈴薯の作付面積の変動について詳細にみていきたい。明治三十二年三十五ヘクタールであった作付面積は、同三十四年十ヘクタールと、約三分の一に減少する。しかし、同三十八年十五ヘクタールと一旦は回復するが、同四十年十ヘクタールと再び減少する。同四十四年十五ヘクタールと増加し、大正四年まで作付面積は十五ヘクタールと一定である。同六年から八年にかけて、作付面積が急増し、四年間で倍化し、大正八年には三十五ヘクタールにまで増加する。同十二年には四十一ヘクタールとなり、作付面積は、今後さらに増加していく傾向を讀みとることができる。

最後に、鳴沢菜の作付面積の変動についてみていきたい。前掲第七図を見てもわかるように、この作物の作付面積は他の作物の作付面積と比較して、一番小さいということである（明治三十六年は例外である）。それとともに、第七図をみて目につくことは、明治四十二年から大正十二年まで、大きな変動がなく、作付面積が、一定である点である。明治三十二年二・八ヘクタールであった作付面積は、明治三十六年には、約五倍の十五ヘクタールにまで増加するが、明治三十八年には十ヘクタール、明治四十二年には、五ヘクタール、明治四十四年三ヘクタール、大正二年四ヘクタール、大正六年二ヘクタール、大正十年三ヘクタール、大正十二年四・五ヘクタールと明治四十四年から大正

十二年までは、ほぼ一定と見なすことができる。

以上のように、明治三十二年から大正十二年までの本村における農作物作付面積の推移を前掲第七図により詳細に検討してきたが、これらの農作物は細部では多少の増減もあるが、以下のように「類型」化を試みてみたい。

(1)他の作物よりも作付面積が群を抜いて広いが、年ごとに漸減していく作物。この場合はあわが、この型と見なすことができる。

(2)一時的に作付が増大するが、すぐに激減し、作付が安定せず、複雑な動きをみせる作物。この場合はそば・小麦がこの型と見なすことができる。

(3)多少の変動はあるが、作付面積の上下は激しくなく、むしろ作付面積が漸増傾向にある作物。この場合は、大豆・馬鈴薯をこの型と区分できよう。

(4)多少の変動はあるが、作付面積がほとんど一定で、大きな変動は見られない作物。この場合には、鳴沢菜がこの型と区分できよう。

以上のように、四つの「類型」に区分を試みたが、この類型が、第二期以降どのように変化していくか、第二節で、また検討していきたい。

大正十二年から昭和十六年

ここでは、大正十二年から昭和十六年までの第二期十八年間の農作物作付面積の推移を前掲第七図によって詳細に検討していきたい。

この時期の農作物の作付面積をみて、まず、目につくことは、第一期のアワやソバのように八十ヘクタール以上の作付けをしている農作物が存在しないことである。それから、この時期の前半、つまり、大正十二年から昭和六年までは、鳴沢菜を除いて、作付面積は変動がないか、あるいは減少傾向にあるということである。とくに、昭和二年から同四年にかけて、アワ、大豆、ソバ、小麦の作付面積が軒並み減少している。これは、昭和恐慌の影響と考えられる。第一期と同様に第二期でも、農作物の作付面積の推移によって、いくつかの作物グループに、分けることが可能であると考ええる。前掲第一図によって、個々の作物について検討していきたい。

まず、あわについて、その作付面積の推移を追っていくと、大正十二年四十二ヘクタールであった作付面積は、さらに減り、大正十四年には、三十五ヘクタールとなっている。昭和四年から昭和十年までは、三十一〜三十五ヘクタールと、大きな変動はない。昭和十二年には四十ヘクタールに作付面積は上向きになりかけたが、二十九ヘクタールと減少し、昭和四年の水準にまで急減する。昭和十六年には再び、作付面積が四十二ヘクタールに回復している。しかし、昭和十六年以降、あわの作付は年を追うごとに漸減していく傾向にある。

次に、そばの作付面積の推移について、詳細に年を追ってみていくと、大正十二年三十八ヘクタール、大正十四年と昭和二年には、三十六ヘクタールと、おおむね安定していた。しかし昭和二年から昭和四年にかけては、三十ヘクタールにまで、作付面積は減少するが、昭和六年には、大正十四年と昭和二年の作付面積の水準にまで回復する。昭和六年には三十四ヘクタール、同八年には、三十五ヘクタール、同十年には、三十三ヘクタール、同十二年には三十二ヘクタールと、昭和六年から同十二年までは、多少の増減はあるが、大きな変動はなく安定した作付が行われていたと考えられよう。同十四年には二十八ヘクタールとやや減少するが、同十六年には、四十五ヘクタールと同十四年と比較して一・五倍に作付面積は増えている。以上のことからみて、ソバの作付けは第一節で述べたような複雑な動

きは、第二期ではしていないことが理解できよう。

次に、小麦の作付面積の推移をみていきたい。小麦の作付面積は大正十二年二十二ヘクタール、大正十四年二十三ヘクタール、昭和二年二十三ヘクタール、昭和四年二十一ヘクタール、昭和六年二十・九ヘクタールと、第二期の当初は、大きな変動はみられない。しかし、昭和八年には、三十三ヘクタールと増加し、さらに、昭和十年には、四十六・七ヘクタールと、一気に倍加するが、昭和十二年には四十・五ヘクタールと、やや減少する。昭和十四年には、四十二・二ヘクタール回復し、昭和十六年には五十・四ヘクタールにまで増加している。第二期の小麦の作付面積は、大正十二年と昭和六年までは大きな変動はなく、一定の作付がなされていたが、昭和八年以降、多少の減少はあるが、総じて増加傾向にあるといえよう。

次に、大麦の作付面積の推移をみていきたい。大麦の作付面積は、大正十二年四十・一ヘクタール、大正十四年四十ヘクタール、昭和二年四十・一ヘクタール、昭和四年四十・一ヘクタール、昭和六年四十ヘクタールと、第二期当初には大きな変動はみられない。しかし、昭和八年には、四十三ヘクタール、昭和十年四十四・九ヘクタール、昭和十二年四十八・七ヘクタール、昭和十四年五十五・三ヘクタール、昭和十六年六十・三ヘクタールと漸増していく傾向にある。大麦の作付面積は第二期においては、一番大きく、それだけ比重が高かったことが理解されよう。

次に、大豆の作付面積の推移をみていきたい。大豆の作付面積は、大正十二年三十八ヘクタール、大正十四年三十七ヘクタール、昭和二年三十七ヘクタールと、第二期当初の六年間には大きな変動はなく、作付面積にはほとんど増減がみられない。しかし、昭和四年から、作付面積は減少をはじめ、同年には、三十四ヘクタール、昭和六年には、十四・四ヘクタールと半減している。昭和八年には十四・九ヘクタールと回復するが、昭和十年には、十四・五ヘクタールと再び減少に転じている。昭和十二年から十四年にかけて二十三ヘクタールと増加するが、昭和十六年に

は二十ヘクタールと減少している。

次に、馬鈴薯の作付面積の推移をみていきたい。馬鈴薯は、大正十二年から昭和四年にかけて、作付面積に大きな変動はみられず、四十ヘクタール前後で一定している。昭和六年、三十二・四ヘクタールに減った後、再び、増加へ転じ、昭和八年三十三・五ヘクタール、昭和十年三十五ヘクタール、昭和十二年四十ヘクタール、昭和十四年四十三・一ヘクタール、昭和十六年四十四・三ヘクタールと漸増傾向にあることが理解できると思う。

最後に、鳴沢菜の作付面積の推移について見ていきたい。鳴沢菜の作付面積は、第一期と同じ傾向で、大正十二年には、九ヘクタールと倍加し、昭和六年九ヘクタール、昭和八年九・六ヘクタール、昭和十年七・五ヘクタール、昭和十二年七・二ヘクタール、昭和十四年八・六ヘクタールと、昭和二年から四年にかけては、作付面積がほぼ、倍になっているが、全体的にみて、作付面積は、他の作物のような大きな変動が、第二期の鳴沢菜にはみられないことがいえよう。

以上のように、大正十二年から昭和十六年までの本村における農作物作付面積の推移を前掲第七図をもとに詳細にみてきたが、第一期と同様に、第二期においても、「類型」化を試みてみたい。

- (1) 作付面積に多少の変動はあるが、年ごとに作付面積が漸増していく作物。この場合は、大麦・馬鈴薯がこの型とみなすことができよう。
- (2) 第二期半ば以降に、作付面積が倍加している作物。この場合は小麦がこの型とみなすことができよう。
- (3) 作付面積が一時的に減少するが、再び回復する傾向にある作物。この場合は大豆がこの型とみなすことができよう。

(4)第二期前半には、作付面積に大きな変動はないが、後半になって増減が目立つてくる作物。この場合あわ・そばをこの型とみなすことができよう。

(5)多少の変動はあるが、作付面積がほとんど一定で、大きな変動は見られない作物。この場合には、鳴沢菜がこの型とみなすことができよう。

以上のように、第二期では五つの「類型」に変化している。第二期では、大麦や馬鈴薯の漸増傾向が目につくが、これは、戦時体制の中での食糧増産に関係があるものと思われる。また、第一期と第二期とで、同じような「類型」の作物に鳴沢菜を見出すことができる。

第三期以降、この五つの「類型」がどのように変化していくか、検討していきたい。

昭和十六年から昭和三十六年

昭和十六年から昭和三十六年までの第三期二十年間の農作物作付面積の推移を前掲第七図によって詳細に検討する。

この時期の農作物作付面積をみて目につくことは、昭和十八年から昭和二十二年にかけては、馬鈴薯・ソバ・大豆・小麦の作付面積がピークに達していることである。特に、馬鈴薯の伸びが著しく、昭和二十二年には、六十九・九ヘクタールと、他の作物よりもとびぬけて作付面積がふえている点である。しかし、昭和二十二年から昭和二十六年にかけて、これらの農作物の作付面積は急減している。中でも、馬鈴薯・ソバの急減が目につく。詳細にみてみると、ソバ・大豆・小麦の作付面積が急減した時と、馬鈴薯の作付面積が急減した時とはズレがあり、馬鈴薯の作付

面積が急増した昭和二十二年、そば・大豆・小麦・あわの作付面積は、いずれも急激に減少し、とりわけそば・あわは、昭和二十年の作付面積と比較して、三分の一に、大豆は半分近くに減少している。これは、終戦直後の劣悪な食糧事情を反映して、馬鈴薯の作付面積が増加したものと考えられよう。作付面積が急減したソバはその後、もう一度大きな変動をしている。第一期に広大な作付面積であったあわは、昭和二十年、二十九ヘクタールと回復したが、その後、漸減に転じ、昭和三十六年には、わずか〇・五ヘクタールにまで減少していく。

個々の作物の作付面積の推移を検討し、本村農業の変遷はアワについて、その作付面積の推移を追っていくと、昭和十六年四十二・四ヘクタールであった作付面積は、昭和十八年二十三・五ヘクタールと半分近くまで減少している。昭和二十年には、二十九ヘクタールと一時的に回復するが、昭和二十二年には八ヘクタールと一気に四分の一近く減少してしまう。昭和二十四年、十六・一ヘクタールと再び回復するが、昭和二十六年十五・八ヘクタール、昭和二十八年十四・一ヘクタール、昭和三十年十二・六ヘクタール、昭和三十二年十一・八ヘクタール、昭和三十四年十・五ヘクタールと漸減していく傾向にかわり、昭和三十六年には、わかず〇・五ヘクタールにまで作付面積は激減している。第一期においては、他の作物を圧倒する作付けがされていたアワも、昭和三十年代に入ると、その急減ぶりは著しく、本村農業経営の一大転換期がきたといえるのではないだろうか。

次に、ソバの作付面積の推移について年を追って詳細に分析したい。第二期には大きな変動があまりみられなかったソバも、第三期に入ると、第一期と同じような、大きな変動を繰り返している。

昭和十六年、四十五・七ヘクタールであった作付面積は昭和十八年三十五・九ヘクタール、昭和二十年五十六・九ヘクタールと増減を繰り返した後、昭和二十二年十八・一ヘクタールと三分の一近くにまで一気に減少している。ソバの作付面積は、その後、さらに減少をつづけ、昭和二十四年十二・八ヘクタール、昭和二十六年十一ヘクタール

と、六年間で作付面積は約五分の一になっている。しかし、昭和二十八年には、二六・九ヘクタール、昭和三十年には、四七ヘクタール、昭和三十二年には、五四・一ヘクタールと、急速に回復している。昭和三十四年には、再び減少に転じ、四六・七ヘクタール、昭和三十六年には、二一・六ヘクタールと、四年の間に半減している。

このように、ソバの作付面積は、第一期と同じような大きな変動を、第三期においても繰り返しているのである。次に、小麦の作付面積の推移について、年を追って詳細に検討していきたい。

昭和十六年五十・四ヘクタールであった作付面積は、昭和十八年、五十三・九ヘクタールと、増加したが、昭和二十年には、四十四・二ヘクタール、昭和二十二年三十六・六ヘクタールと減少に転じた、昭和二十四年には、三十九・一ヘクタールと回復するが、昭和二十六年、二十八年とも三十八ヘクタールと大きな変化はない。昭和三十年には、三十三ヘクタールと、減少するが、昭和三十二年には、四十三・六ヘクタールと再び回復する。昭和三十四年に三十三・一ヘクタール、昭和三十六年には、三十二ヘクタールと再度、減少する傾向へと変わっている。

次に、大麦の作付面積の推移について年ごとに見ていきたい。

昭和十六年六十・三ヘクタールであった作付面積は、昭和十八年三十・四ヘクタールと一気に半減している。昭和二十年三十・七ヘクタール、昭和二十二年三十一・六ヘクタール、昭和二十四年三十二・二ヘクタール、昭和二十六年三十二・八ヘクタール、昭和二十八年三十ヘクタールと十年間は、作付面積は横バイで大きな変化はない。昭和三十年には、三十八ヘクタールと、やや増加するが、昭和三十二年三十四・八ヘクタールに減少。昭和三十四年四十二・五ヘクタールと再び増加するが、昭和三十六年二十五・三ヘクタールに減少している。

次に、馬鈴薯の作付面積の推移について、年ごとに検討していきたい。

昭和十六年に四十四・三ヘクタールであった作付面積は、昭和十八年四十七・九ヘクタール、昭和二十年五十八・

五ヘクタールと漸増し、昭和二十二年には六十九・九ヘクタールと、六年間で一・五倍に作付面積がふえている。馬鈴薯の作付面積が増加したのに対して、他の作物、ソバ・小麦・大豆・アワの作付面積は減少しており、昭和二十二年には、本村の普通畑は、馬鈴薯の作付けが圧倒的であったことがわかる。しかし、昭和二十四年には五十二・五ヘクタール、昭和二十六年には四十・三ヘクタール、昭和二十八年には、三十九・六ヘクタールと、六年間で半分近くにまで作付面積は減少してしまふ。しかし、昭和三十年には、四十七・五ヘクタールと回復し、昭和三十二年四十八・三ヘクタール、昭和三十四年五十・八ヘクタール、昭和三十六年五十一ヘクタールと漸増傾向にある。他の作物と比較してみても、昭和三十六年に作付面積がふえる傾向にあるのは、馬鈴薯のみである。

最後に、鳴沢菜の作付面積について、年を追って詳細に検討していきたい。

昭和十六年には、鳴沢菜の作付面積は記録されていないが、昭和十八年には、三・四ヘクタールであった。昭和二十年には、四・八ヘクタール、昭和二十二年四・五ヘクタール、昭和二十四年五・二ヘクタール、昭和二十六年四ヘクタール、昭和二十八年三・六ヘクタール、昭和三十年三・七ヘクタール、昭和三十二年五・四ヘクタール、昭和三十四年三・九ヘクタール、昭和三十六年三・八ヘクタールというように、年ごとの作付面積の数字を書きあげてみたが、鳴沢菜は、第一期・第二期と同様に、作付面積には、大きな変動はみられず、安定した傾向にあるということがいえる。

以上のように、昭和十六年から昭和三十六年までの本村における農作物の作付面積の推移を年ごとに追ってみたが、作付面積の変動によって、農作物をいくつかのグループに分け、さらにそれを、第一・二節と同じように、「類型」化してみる。

(1)第三期のはじめは、急激に作付面積が減少したあと、作付面積に大きな変化はなく安定し、第三期の後半になる

と、増減が目立ってくる作物。この場合、大麦・小麦がこの型とみなすことができよう。

(2)他の作物の作付面積が減少している中で大幅に増加し、その後、一時的に作付面積は減少するが、再び、作付面積が増加する傾向にある作物。この場合、馬鈴薯をこの型とみなすことができよう。

(3)一時的に作付面積が増加するが、その後すぐに作付面積が急減。再び、作付面積は減少する前の水準にまで回復するが、安定せず、減少する傾向にある作物。この場合ソバ・大豆をこの型とみなすことができよう。

(4)作付面積の増減を繰り返すが、作付面積は漸減する傾向にある作物。この場合、アワをこの型とみなすことができよう。

(5)作付面積がほとんど一定で、大きな変動が見られない作物。この場合には、鳴沢菜がこの型とみなすことができよう。

昭和三十六年から昭和六十年

高度成長期の昭和三十六年から昭和六十年までの二十四年間の農作物作付面積の動きを前掲第七図によってみていくと、まず目につくことは、キャベツの作付面積が、昭和四十年から同四十五年までの五年間で、約二倍になったという急激な増加と、それとは対照的に、第三期の終わりに、漸増する傾向にあった馬鈴薯の作付面積が、昭和三十六年から同四十八年にかけて、約三分の一に減少している点である。大豆の作付面積も昭和三十六年から同四十年までの四年間で約二分の一減少している。

個々の農作物の作付面積の変動を第7図によって詳細に追っていききたい。

まず、キャベツについて、その作付面積の変動を検討してみたい。鳴沢村で、キャベツがつくられはじめたのは、昭和三十年ごろであり、一・八ヘクタールの作付面積であったが、昭和四十年五十六・一ヘクタールと、約五十倍以上の作付面積となる。同四十五年には、約二倍の百二十四ヘクタール、同四十八年百三十四ヘクタールと急増していく。四十八年から五十六年までの八年間は、小さな増減はあるが、およそ百三十ヘクタールで安定している。六十年になると、更に増加し、百五十九ヘクタールにまで作付面積が広がっている。このようなことから、鳴沢村は高度成長の昭和四十年代に農業の中心が蔬菜栽培、とりわけ、キャベツが村を代表する農作物となったといえよう。

次に、馬鈴薯の作付面積の推移について検討してみる。第三期のおわり、昭和三十年から同三十六年にかけて、漸増の傾向にあった馬鈴薯の作付面積は、三十六年の五十一ヘクタールをピークに、減少に転ずる。昭和四十年、四十・七ヘクタール、同四十五年、四十一ヘクタール、同四十八年には、十八ヘクタールと、半分になってしまふ。同四十八年から同五十六年までの八年間は十五と十八ヘクタールと、ほぼ安定していたが、同六十年には、四ヘクタールと、二十年間で十分の一以下にまで作付面積が減ってしまう。第7図をみても、キャベツと、馬鈴薯は極めて対照的である。

馬鈴薯と同じようなことは、大豆にもいえよう。大豆の作付面積の推移を第七図を追いながらみていくと、昭和三十六年二十四ヘクタールであった作付面積は、同四十年に十三・四ヘクタールと半減し、同四十五年七ヘクタールと、さらに半減している。同四十八年から同五十六年までの間は一と三ヘクタールの間で、ほぼ一定であったが、同六十年には〇ヘクタールとなっている。

鳴沢菜についてみると、昭和三十六年から同五十六年までの作付面積は、七と九ヘクタールの間で、ほぼ一定とみなすことができよう。鳴沢菜については、第一期と第三期まで同じような傾向にあるが、第四期もこれらの時期

と同様に考えることができる。

以上のとおり、昭和三十六年から同六十年までの農作物の作付面積の推移を第七図をもとにしてみてきたが、前述した通り、この第四期において、鳴沢村は蔬菜栽培の農業に完全に変貌したといえよう。このようななかで、鳴沢菜はたえず一定の作付面積を維持しているのは注目される点であろう。

まとめ

農作物作付面積を手がかりとして本村の農業の推移を四期に分けて検討してきた。これまでに明確になった点を列記して、まとめにかえたい。

- (1) 四期を通して、作付面積の「類型」が同一なのは、鳴沢菜であること。
- (2) 第一期では圧倒的な作付面積であったアワが、増減を繰り返すが、結果として、ほとんど作付けがなされない程度まで減少してしまうこと。
- (3) アワにかわって、馬鈴薯の生産が伸びる傾向にあること。
- (4) ソバが、第一期と第三期とで作付面積の増減の変動が大きいこと。
- (5) 第二期の前半には、どの作物も作付面積に大きな変動がなく、これには、養蚕業の伸長が考えられること。
- (6) 第四期になると、キャベツの作付面積が他の農作物の作付を圧倒し、鳴沢村は蔬菜栽培の農業へと大きく転換している。

結論として、本村農業は雑穀生産を中心とする農業から、蔬菜栽培を中心としたものへとかわっていくということがいえるであろう。

(鈴 木 利 秋)